

地域子育て支援活動が保育所保育にもたらす効果

— 地域子育て支援の内容と方法Ⅳ —

太田 光洋（旭川大学女子短期大学部）

中山美知子（旭川市地域子育て支援センター「おひさま」・鉄道弘済会旭川保育所）

I 問題と目的

子育て支援の必要性が叫ばれ、それが新たな保育所の役割として位置づけられるようになった。現在は、多くの保育所が子育て支援を視野に入れながら保育所の変革を進めている。

その一方で、子育て支援に否定的な意見もないわけではない。それらは大きく分けて2つに集約できるように思われる。一つは、子育て支援が、親を甘やかし、親の育児力を低下させるという、親に対する問題を指摘するものである。もう一つは、子育て支援が保育所にとって大きな負担になる、通常の保育活動に支障をきたすという保育所保育との関係の問題を指摘するものである。これらの問題は、子育て支援が本当に必要なかどうかという基本的な問いを含むものであり、現在の子育て支援のあり方—内容や方法といってもよい—を問い直すものでもある。

前者の問題に対して、筆者らは、子育ての困難を個人の問題として受け止めるのではなく、社会の問題として受け止めること、現代の困難な子育て、子育ての現実を受けとめ、人としても発達途上にある親たちに寄り添って、親を子育ての主人公として子どもとしっかり結びついていけるような支援のあり方を追求していくことが必要であることを指摘してきた。

後者の問題は、保育所が子育て支援に取り組むにあたって大きな問題になるにもかかわらず、その検討はほとんどなされていない。その要因として、子育て支援がなされるようになってから時間が経っていないことが一つの理由と考えられるが、むしろ子育て支援活動を通常保育との関係のなかで捉えようとする視点を持たないできたことによるのではないだろうか。

筆者らは、地域子育て支援センターの開設の準備段階から、通常保育との関係を念頭に置いて検討してきた。そして、地域子育て支援センター開設3年目に入る頃からその手応えを感じ始め、現在では次第に支援センター事業への取り組みが通常保育を豊かにする経験となっているという確信を持ちつつある。

本稿では、その過程を振り返り、子育て支援活動と

通常保育との関係について検討し、すべてが一般化できるとは限らないが、両者の関係をとらえなおす一つの問題提起としたい。

II 子育て支援への取り組みを躊躇させる要因

保育所で子育て支援に取り組もうとするとき、それを躊躇させる心配な点がいくつかある。もちろん、支援センターの活動を、保育所がそのままで行えるのかという不安があることはいうまでもない。保育所の持っている保育についての知識は、それでかなりの子育て支援機能を果たすことができる。しかし、その場合、子育て支援が通常の保育業務を越えるものであり、通常保育からの一方的な持ち出しであると捉えがちになり、そのために保育の質を低下させないための予防策を講じようとするのが少なくない。

事実、通常保育についてのいくつかの検討がなされた。以下に示すものは主な例である。子どもたちの実際の姿もあわせて記しておく。

第一に、保育所に在籍する子どもたちが、親子でやってくるセンター利用者をどのように受け止めるか、が問題になった。センターにやってくる親子をみて、うらやんだり泣いたりするのではないか、という心配である。これは先行して開設された支援センターでの取り組みから教えられたとおり、現実には保育者が考えるほど問題になることはなく、子どもたちは予想外に自然に受け入れた。

次に、センターに通ってくる子どもを保育所のクラスにいっしょに入れて保育を行うかどうかという点が検討された。この点については、保育所で預かっている子どもたちの保育を大切にするという立場から、センターの子どもをいっしょに保育することは原則として行わないこととした。この点は、現在も変わっていないが、自由遊びや行事など少しずつ交流の場が生まれてきているように思われる。また、いっしょに保育をしている保育所も少なくないことから、保育内容や保育形態をあわせて比較検討がなされる必要があるだろう。

第三は、スペースの問題である。限られた施設を利用することから、たとえばホールなどが通常保育で使用できなくなるということが問題として生じてくる。この点での活動の制約は避けられない。

Ⅲ 子育て支援が保育所保育に及ぼす効果

以上のような、いわばマイナス面が心配されるなかで、子育て支援への取り組みが、以下に示すような保育所の保育に多くのプラスの効果をもたらしている。

1 保育所の親子関係の見直し

支援センターでの親子いっしょの活動では、親子のふれあい遊びや家庭でもできる遊びを取り上げることが多い。子どもとどうかかわったらいいかかわらず不安を抱く母親にとって一つの指針を与えるものでもある。こうした取り組みを通して、保育所に在籍する親たちとの関わりをみると、保育所でそうした遊びを親に伝える機会はほとんどないことが見えてきた。そのため、参観日などにそうした遊びを取り上げるなどの試みを行った。

支援を求める親と保育所に通う親の悩みは異なる点もあると考えられるが、子どもの育ちという点から考えるとき、いずれの親子にとっても必要な経験や活動があるだろう。

2 保育者としての親理解と関わりの変化

子育て支援活動で親の声に耳を傾け共感関係を築こうと心がけながら親理解を深めるなかで多くの気づきがあった。

そのひとつは、従来、保育所保育のなかで子どもたちのようすから家庭での親子関係の大切さを感じてきたことから、親に子どものようすや問題と思われる事柄を伝え、子どものためにどうするのがよいかをともに考えてようとしてきた。しかし、子どもと過ごす時間の長さや専門性から子どもの立場を代弁しようと、まったく善意でありながら、結果として親を責めてしまうこともあったのではないかと捉え直した。表面的には親が受け入れたかのように見えてもかえって距離ができてしまっていたのではないかと。難しくなっている親との関わりを具体的に捉え直すよい契機となった。

3 外部機関との関係の深まりによる保育の深化

子育て支援をきっかけに医療機関、児童相談所、保

健所、母子通園センター、言葉の教室、他の子育て支援センター、大学など、外部機関との関係が広がった。このことは、保育所だけで抱え込みがちであった保育場の困難を解決する多くの手がかりと支援を提供するものとなった。

たとえば、発達の遅れや障害に関する悩みについて気軽に相談できるようになり、アドバイスをもらうことができたり、継続的に子どもをいっしょにみていくことも可能になった。必要があれば支えてもらえるという安心感は保育を安定させ、小さいながらも保育所を支えるネットワークは、保育所を外に開くと同時に、一人ひとりの子どもをていねいにみることができるという意味でより質の高い保育を保障する。

4 子育て支援をきっかけとした学びの活性化

前述した点と関連が深いのが、子育て支援に取り組むことによって、新たに学ぶことが多くなり、それが保育者を元気づけるという面があるように思われる。

たとえば、現代の母親について子育て支援の対象としてみると、母親が育ってきた背景、現在置かれている状況などについて客観的に捉え直すことになった。また、相談事業については、最も不安があったと同時に、いわゆるカウンセリングについて学んだり、ケースカンファレンスを行うなど相談能力の向上を図るなどした。また、他機関との関係のなかで学ぶことも多かった。以上のような経験は総合的な子ども理解を深め、保育者自身の存在意義（自己効力感と言ってもいい）を強く感じ、自身を深めたと考えられる。

以上述べてきた点は、子育て支援が保育所を基盤として行われていることから、子育て支援担当保育士一人のものとしてではなく、保育所の保育全体に波及していくものである。

Ⅳ 今後の課題

子育て支援を保育所保育との相互関係のなかで捉えることができるようになったことは、今後の保育を考えるうえで重要な点である。今後の課題としては、本文中に指摘したことはもちろん、さらにそれぞれの保育活動から多くを学びたい。また、保育所に通う親子と子育て支援センターを利用する親子の相違も明らかにしたい点である。子育て支援が保育所を忙しくしていること事実としてあり、質の高い保育、子育て支援のために、これも解決の方向を探る必要のある課題である。